

兵学から人間学へ

——戦後における岩畔豪雄の思索について—— (上)

川 合 全 弘

From Military Science to Humanics: On the Thought of IWAKURO Hideo in the Postwar Years (1)

KAWAI Masahiro

目次

1. はじめに
2. 人間学の視点から振り返った近代兵学の展開
 - 1) クラウゼヴィッツによる近代兵学の確立——絶対戦争概念と政治的統制論
 - 2) ルーデンドルフと石原莞爾とにおける近代兵学の視野狭窄 (以上本号)
 - 3) 岩畔豪雄による近代兵学の止揚
3. 岩畔人間学の発展
4. おわりに

1. はじめに

前半生を陸軍軍人として過ごした岩畔豪雄は、戦後長らく一切の定職に就かず、読書と思索に明け暮れる学究生活を続けた後¹⁾、晩年にその成果を世に問うべく、二冊の哲学的著作を公刊した²⁾。要

1) とはいえ岩畔は全く活動から離れたわけでない。この間における岩畔の活動については、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——上・中・下」、『産大法学』50巻1・2号(2017年1月)、51巻1号(同年4月)、53巻2号(2019年7月)を参照されたい。一切の定職に就かなかった理由については臆測の域を出ないものの、戦後における岩畔の壮大な知的発展の跡を辿る本稿の視点から見ると、時代の軍事的政治的現実に対して——壮大な構想を描くために必要な——知的距離を取るためであった、と言うべきであろうか。

2) 一冊は『戦争史論』(恒星社厚生閣、1967年3月)であり、いま一冊は遺著となった『科学時代から人間の時代へ』(理想社、1970年12月)である。

職にあった軍人時代の岩畔の活動が日本の軍事史や政治史、日米外交史などにおいてしばしば論じられてきたことと対照的に³⁾、これら二冊が公に論じられることは従来ほとんどなかったように思われる⁴⁾。本稿は、ほぼ黙殺されてきたと言ってよいこれら二冊をあらためて取り上げ、戦後における岩畔の思索の特質とその今日的な意義とについて考察しようとするものである⁵⁾。

本論に入るための準備として、ここで、表題に掲げた「兵学」と「人間学」という用語にそれぞれ

3) 特に、木戸日記研究会が1967年に岩畔本人から聴き取りを行い、その後非売品として刊行された『岩畔豪雄氏談話速記録』（日本近代史料研究会編、1977年）が、近年、岩畔豪雄『昭和陸軍謀略秘史』（日本経済出版社、2015年）として公刊されたことにより、軍人岩畔をめぐる研究は再び盛んになってきたように思われる。

4) 管見のかぎり、書評は『戦争史論』について次の二篇があるだけである。西浦進「体験と深い思索から——岩畔豪雄著『戦争史論』」、読売新聞夕刊、1967年4月27日、7面、および太田義夫「書評——岩畔豪雄著『戦争史論』」、「産業経済叢書」2(2)、1967年9月、164～169頁。『戦争史論』の「あとがき」によると、戦後二十年に及ぶ岩畔の学生生活は、「戦争論を書きたい」という積年の願いを実現すべく、「戦争と平和に関する読書と思索」に費やされた、という。この述懐と、陸軍時代の岩畔の枢要な地位や華々しい活動歴とを重ね合わせて考えるならば、岩畔晩年の二著を読む者が、それらに、大東亜戦争とそこにおける岩畔自身の体験との直接的な省察を期待したとしても不思議でない。しかしながら『戦争史論』は戦争の一般理論と人類の戦争史とを主題とする壮大な理論・歴史書であり、『科学時代から人間の時代へ』は近代科学文明の転換を遠望する高邁な哲学書であった。読者の期待と著者の主題とのこの食い違い、およびディレクタントの手になる哲学的著作への専門主義的な偏見が相俟って、これら二著に対する今に至る黙殺を生んできたように思われる。ちなみに岩畔は、そのような偏見を予期したかのように、軍人としての体験を独自の哲学へと昇華したソクラテスと王陽明の歴史的事例を引き合いに出しつつ、「実践につながる哲学」が「きびしい体験と深い思索との合一」によってのみ樹立されうる、と断言している。岩畔『科学時代から人間の時代へ』、22頁。

5) 本稿は、世界問題研究所の共同研究プロジェクト「科学技術の発展と人類社会の変化」の一環として筆者が取り組む個人研究の中間報告である。筆者は、全面核戦争の脅威への対処法という兵学的問題を、幅広く科学技術文明発展の非人間的帰結とその克服法の問題として考察しようとした岩畔豪雄の思索の中に、今日における科学技術のより多方面に及ぶ加速度的な発展を人類社会の平和と幸福という目的論といかに調和させるべきか、という我々自身の問題意識の原型を見、願わくはそこに、我々にとっての指標ないし模範を見出したいと思う。科学技術の発展は今日早まるばかりであり、我々はそれに背を向けることができないどころか、むしろ進んでその今日的な水準を把握し、それに基づいて社会を運営する、喫緊の必要に迫られている。とはいえ科学技術が社会運営における唯一の基準となりうるわけではけっしてない。社会は他方で何よりも人間の本性に基づいて組織され、かつまた人間の人格的尊厳を規範として運営されなければならない。人間の本性や尊厳が何であるかは、科学が判断しうる事柄でなく、むしろ哲学や宗教にこそ託されるべき仕事であろう。科学的であることや技術水準に合うことと人間的であることとの調和、社会運営におけるこの古くて新しい課題は、今日いよいよその重要性を増している。本稿で扱う兵学は、戦争——すなわち暴力による破壊行為——を主題とするがゆえに、科学の諸分野の中で、科学的であることと人間的であることとの不調和がとりわけ露わとなる分野であろう。近代戦争史は戦争の科学化による戦争威力の絶えざる拡大の歴史であり、近代兵学史はその中において科学性と人間性とを辛うじて調和させようとする試行錯誤の歴史である。この特殊分野の考察を通じて上記プロジェクトにおける一般的な主題にささやかなりと寄与すること、これが本稿の意図である。

必要最低限の定義を与えておきたい。「兵学」とは古来戦争に関わる多少なりとも理論的な考察一般を指すために用いられてきた語であるが、本稿ではとりわけカール・フォン・クラウゼヴィッツによって確立され、エーリヒ・ルーデンドルフと石原莞爾とを経て岩畔豪雄へと継承された近代戦争概念の一系譜を指している⁶⁾。クラウゼヴィッツは、——彼がナポレオン戦争の中にその顕著な現れを見出した——近代戦争の極限形態を「絶対戦争」という概念によって理論的に把握するとともに、兵学的思考の中に「政治の立場」を導入することによって近代戦争の統制を目指す、高度に学問的な戦争論への途を拓いた⁷⁾。クラウゼヴィッツのこの近代的戦争概念に対してあえて兵学という古風な響きを伴う語を充てたのは、先ず以て、戦争をあくまで人間の本性に適い、文明社会の目的に応じる一手段として統制すべきであるとする、その古典的性格を強調し、併せてそこに、後に岩畔が展開することになる人間学の萌芽を見て取るためである⁸⁾。とはいえしかしながら、近代戦争概念に関してクラウゼヴィッツが採ったこの古典的立場は、その後の兵学史において必ずしも維持されることができなかった。本稿の目的に即してその理由を整理するならば、それは、第一にクラウゼヴィッツが前提とした科学技術の水準が当時なお低いものであったために、「絶対戦争」概念を継承したルーデンドルフと石原莞爾とが、第一次世界大戦を通じて明らかとなった科学技術のあまりにも急速な発展とその軍事的応用の結果として増す戦争威力の拡大という歴史的趨勢に圧倒されるままに、政治による戦争の統制というクラウゼヴィッツ兵学の古典的立場自体を放棄してしまったこと⁹⁾、第二にクラウゼヴィッツ兵学の政治的統制論が依拠する、国民国家的に構想された「政治の立場」が、二度の世界大戦を通じて有効性を失ってしまったこと、として要約されうる。このような経緯を通じて岩畔にさしあたり明らかとなった課題は、近代戦争を統制するために兵学が従来の専門領域を超えて、軍事

6) 四者の戦争概念の詳細については、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、『産大法学』53巻2号、1～74頁を参照されたい。

7) クラウゼヴィッツの絶対戦争概念の詳細については、同、6-21頁を参照されたい。

8) 筆者が念頭に置く兵学の古典性とは、戦争の暴力的本質と文明社会の目的との間に妥当な均衡を見出す努力の模範的なあり方を指している。卓近な譬えを用いれば、無闇に刀を振り回したり、まして刀に振り回されたりするのではなく、抑制的に刀を使い熟す兵学とでも言えようか。戦後における岩畔の思索を「兵学から人間学への発展」として跡付けようとする本稿の視点は、兵学と人間学との断絶性を指摘するばかりでなく、兵学のこの古典的な在り方と岩畔の新たな人間学との連続性にも注目するものである。ちなみに岩畔の遺著『科学時代から人間の時代へ』に解説文を寄せた浅野佑吾は、岩畔における兵学と人間学との内的連続性について、次のように述べている。「著者〔岩畔を指す——引用者〕の生涯における努力の志向はことごとく人間の完成に向けられており、しかもその大部分は軍人としての実践的修練が中核となって発展して来たものと思われる」（浅野佑吾「この本を読む人のために」、岩畔『科学時代から人間の時代へ』、418-419頁）。

9) ルーデンドルフの「全体戦争」概念については、上掲拙稿、下、21-33頁を、石原莞爾の「最終戦争」概念については、同、33-48頁を参照されたい。いずれの戦争概念も、来るべき巨大戦争の政治的統制を断念し、もっぱら運命論や終末論という独断論的主張によってその全面的受容と耐忍を国民に説くものであった。

技術の恐るべき発達をもたらした自然科学の今日の水準や、巨大化した軍事力を統制するための国際的な政治の在り方などという、より広い問題領域へと視野を広げなければならないこと、それを通じて、かつてクラウゼヴィッツが確立した近代兵学の古典的立場を、今日の科学技術水準（核戦力）と国際政治的動向（冷戦）とを踏まえた上で再構成しなければならないこと、これであった。

さて本稿で云う「人間学」とは、このような問題意識の下に岩畔が志向した新しい学問的立場を云う。さしあたりそれは近代兵学の古典的な在り方を回復しようとする兵学的努力を指したが、しかし近代科学文明そのものの問題性へと視野を広げてゆくにつれて、岩畔の学問的努力はいっそう根本的な性格を帯びるに至った¹⁰⁾。戦争の科学化が戦争の非人間的な巨大化を帰結したとするなら、その弊害を克服する途は、兵学の域を超えて、科学文明それ自体の人間化の中に求められなければならない。岩畔の所説を総合すれば、岩畔が目指す人間学は、次のような四つの特長を併せ持たなければならない。第一にそれは、戦争のみならずあらゆる人間行為の基盤が人間の本性にあることを知り、それゆえ人間本性の深い洞察に立脚する学でなければならない。この要請は元々岩畔自身の本来的な専門領域たる兵学に由来するものである。というのも戦争が人間の生死を直接に左右しようとする重大な行為である以上、諸学の中でも特に兵学は、死地において露わとなる人間の本性について予め深く知らなければならないからである¹¹⁾。岩畔の人間学は、近代兵学の行き詰まりを打開するために人間本性につ

10) 岩畔自身はこの新たな学問的志向について、「ヒューマニクス」（『国策決定の条件』、『国策』昭和31年6月、53頁）、「進化する人間観」（『進化する人間観』、『国策』昭和33年6月、24頁）、「世界人類の人間性回復を求めて一つの提言を試みようとする……新しい哲学」（『科学時代から人間の時代へ』、20～21頁）、「人間の学問」（同書、21頁）、「人間学」（同書、23頁）、「時代の転換点に立つ現代の人間の希求する新しい時代の自己救済の道」（同書、25頁）などと、「人間」を意味する様々の形容句を用いて説明している。ちなみに浅野佑吾は、岩畔の思想形成過程を、禅時代、漢学時代、自然科学時代、哲学時代の四期に分けて説明しており（浅野佑吾、前掲書、409～419頁）、本稿が扱う戦後期は浅野が云う「哲学時代」にほぼ該当する。これを手掛かりとすれば、戦後における岩畔の思索は、戦前・戦中期に獲得された、近代兵学、禅、漢学、自然科学の素養を基礎としつつ、上述のような文明論的課題と取り組むことを通じて、次第に哲学的相貌を帯びるようになった、と言ってよい。とはいえそれは、特定の哲学的専門領域に安住する性質のものでなく、むしろ巨大な文明論的課題の解決に向けて道なき道を行く哲学的実践の様相を呈した。それゆえ本稿では、岩畔が云う「人間学」に対して、既成の学問的枠組みを無理に押し付け、そうすることによって言わば「角を矯めて牛を殺す」がごとき愚を犯すことを避けるべく、人間学の呼称の下に岩畔自身が語るところとそこに岩畔が込めようとした哲学的な意図とをできるかぎり尊重する姿勢を採りたいと思う。ちなみに本稿表題の英文表記において、一般に「人間学」を表す“anthropology”という語でなく、“humanics”というあまり一般的でない語を用いたのは、岩畔自身が上掲の論文でこの語を用いていることによるだけでなく、このような考慮にもよる。

11) クラウゼヴィッツ兵学の人間学的基礎については本論で言及するが、人間本性についての深い洞察は近代兵学ばかりでなく、古来優れた兵学の要件であったように思われる。岩畔の二著には、中国古典兵学からの引用が頻出する。岩畔は例えば次のように述べている。「哲学のみならず人間は常に死を見つめて自己にふさわしい態度を平素から決めておく必要がある。生命を危険に曝す機会の多い者は特に必要であるが、この際、死を

いての考察を、戦場に限られた兵学の狭い視野を超えて、本格的な哲学的研究へと高めようとするものである。第二にそれは、戦争や政治や経済といった個別事象を対象を限定せず、人間事象の全体を総合的に考察する学でなければならない。この要請は、岩畔がルーデンドルフ兵学から引き継いだものである。岩畔によると、ルーデンドルフの戦争概念が明らかにしたことは、現代の戦争が武力ばかりでなく、政治、経済、思想、謀略等のあらゆる力を動員する「総力戦争」と化したこと¹²⁾、これであり、それゆえ現代戦争を効果的に遂行するために兵学がその考察対象をあらゆる人間事象へと拡大しなければならないこと、これであった¹³⁾。翻ってこのことは、全面核戦争と人類絶滅の危機を回避するためにも、新たな学が、核戦力をめぐる戦略論や政略論といった兵学固有の領域に終始するだけでは十分でなく、そもそも核兵器という未曾有の巨大戦力の出現を可能ならしめた科学文明——なにかんづく文明の基軸を成す自然科学——の本質を把握し、それをあらためて人間事象の全体的関連において統御しうる学でなければならないことを意味しよう。第三にそれは、科学文明の全地球表面への浸透という世界史的趨勢に対応して、国民的限界を越える人類的自覚と世界的視野とを備えた学でなければならない¹⁴⁾。第四にそれは、科学文明を転換する起点が個々の人間の生き方の変革に求めら

軽んずることは死を重んずるのと同様、慎むべきである。部下をもつ者は特に自己ならびに部下の生命を重んずることが必要である。危機に際しては孫子の逆説“死を必すれば生き、生を幸すれば死す”という理法を銘記しなければならない」（『科学時代から人間の時代へ』、275頁）。これは、死を恐れる人間の本性に照らして危機的状況への逆説的な対処法を説く、兵学上の一理を述べたものであろう。ただしこの引用文の出典は『孫子』でなく、『呉子』である。『孫子』にも、「これを死地に陥れて然る後に生く」という相似た趣旨の一文がある（金谷治訳注『新訂孫子』岩波文庫、2000年4月、161頁）。

12) 岩畔『戦争史論』、71頁。

13) ルーデンドルフの「全体戦争」概念に関する岩畔の理解は、それを国家総力戦の理論と見なす日本陸軍における一般的な理解と異ならない。しかし実際のところルーデンドルフの「全体戦争」概念の本質は、全体戦争遂行のために国民を純然たる戦争共同体として全体化する必要を唱え、国民の共同性の実質を人種的同質性によって確保しようとする、全体主義的政治思想たる点にあった。とはいえ岩畔自身の思想を論ずる際に、「全体戦争」概念の解釈論に立ち入ることは無用である。ルーデンドルフの「全体戦争」概念の本質については、第二章の2)を参照されたい。また日本陸軍におけるその国家総力戦理論としての受容については、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」の註53、22～23頁を参照されたい。

14) 岩畔が京都産業大学の管理下に創設した世界問題研究所の独特の名称には、岩畔のそのような問題意識が託されていた。若泉敬や石田雅己によると、研究所開設に際して岩畔は「世界之心」と題する漢詩を作り、国民の範囲を超えて全人類を我が同胞としうる人間の心のあり方を追究する研究所の理想を示したという。次にその拙訳を記す。「其心を大きくして世界之物を容れる／其心を虚しくして世界之賢を挙げる／其心を勞して世界之勢を知る／其心を潜めて世界之理を究める／其心を注いで世界之計を謀る／其心を平らかにして世界之事を論ずる／其心を励まして世界之義を行う／其心を正して世界之惡を斥ける／其心を定めて世界之變に應ずる／天を敬い人を愛し誓って世界之和を致す」。若泉敬「追悼記」、岩畔伸夫編『追想記』、47～48頁、および石田雅己「岩畔聯隊長を偲ぶ」、近衛歩兵第五聯隊史編集委員会編『近衛歩兵第五聯隊史』下巻、670頁。

れるべきであることから、科学的認識論の限界内にとどまることなく、人格の完成を目指す実践的な学でなければならない¹⁵⁾。以上を要約すれば、岩畔が云う人間学とは、「世界人類の人間性回復¹⁶⁾」に向けた科学文明の転換を可能にすべく、人間本性の学、人間事象の学、世界人類の学、人格完成の学という、互いに関連する四つの人間的な要請に応えうる、新しい学問的立場を志向するものである、と言いうる。

以下、第二章では岩畔のこのような思索がそもそも兵学に由来しながら、兵学の限界を自覚することを通じて兵学自体を止揚する方向へと展開した思想史的経緯を論じ、第三章では岩畔の人間学が持った上記のような特徴とその今日的意義とについて考察することとしたい。このような順序を踏むことによって、戦後における岩畔の思索の特質を、彼の軍人時代との連続性と断絶性との両面において理解することが可能となろう。

2. 人間学の視点から振り返った近代兵学の展開

1) クラウゼヴィッツによる近代兵学の確立——絶対戦争概念と政治的統制論

筆者はすでに別稿においてクラウゼヴィッツからルーデンドルフと石原莞爾とを経て岩畔豪雄へと至る近代兵学の展開を概念史的に論じたが¹⁷⁾、ここでは、戦後における岩畔の思索の人間学的発展の起源という視点から、あらためて近代兵学の展開を簡単に振り返ってみたい。

クラウゼヴィッツの『戦争論』は、いまだ航空戦力や核戦力といった現代的軍事技術の登場を見ない十九世紀前半の書であるにもかかわらず、戦争の暴力的本質への鋭い洞察とそれを冷静に人間事象全体の中に位置づける政治哲学的構想力とによって、近代兵学史において不朽の古典たる地位を占める。同書の要旨は、第一に近代戦争の激烈な暴力性をその極限の姿において正確に認識するために、いったん一切の現実的な条件を捨象して純理論的な戦争概念、すなわち「絶対戦争 (Absoluter Krieg)」の概念を構成すること、第二にそれに「現実の戦争 (Wirklicher Krieg)」の概念を対置することを通じて、人間事象の一部としての戦争が人間事象の全体的関連の中で諸々の現実的な制限を被り、かつまた人間事象全体の調整に責任を負う政治によって目的のための手段として統制されるべきであることを明らかにすること、として整理しうる。これら二つの要旨は、前者を手段論とし後者を目的論とする密接不可分の関係にある。言い換えれば、近代戦争の極限的な姿を概念によって把握することは、戦争の絶対化ないし自己目的化を追求するためでなく、むしろその反対に、戦争を人間社会全体の利害に

15) 岩畔によれば、人間学は、「未来の人間像」として「完全人」を目標としなければならない。岩畔「進化する人間観」、前掲書、43頁。

16) 『科学時代から人間の時代へ』、20頁。

17) 前掲註6を参照されたい。

とって耐えうる範囲内に制限するためである¹⁸⁾。

さて上記の視点から見て重要なことは、クラウゼヴィッツが後者の要旨、つまり戦争の政治的統制を論じる際に、第一に戦争を制限する現実的な要因としての人間本性と、第二に国民の事業全体との関連において戦争を最終的に統制すべき「政治の立場」という二つの要素を強調していることを確認すること、これである。

まず第一の要素について、クラウゼヴィッツはこう述べている。「人間とはもともと不完全な存在なのであって、常に絶対的完全性とはほど遠いところにある。幸いこの人間性の欠陥は相闘う両者について言い得ることであり、これがまた戦争論における抽象的観念上の行きすぎを緩和する役割をはたすことにもなる¹⁹⁾」。この人間の不完全性について、『戦争論』では、「人間の心にある生得の臆病と不決断²⁰⁾」、「人間の洞察と判断の不完全さ²¹⁾」、「天性臆病な人間の本性²²⁾」などと様々な表現で指摘されているが、『戦争論』の論旨を正確に理解する上で看過すべきでないと思われることは、現実の戦争を制限するこの人間的要因が、——「欠陥」や「臆病」や「不決断」などの否定的表現から推測されうるほどに——もっぱら否定的にのみ見られているわけではなく、むしろ兵学が戦争という重大な人間事象と取り組む上での根本的な与件、すなわち人間の条件と見做されていること、これである。この人間の条件が、一方で現実の戦争を生み出す原因となり、他方で現実の戦争を制限する原因ともなる²³⁾。戦争の本質を「絶対戦争」概念によって理論的に認識するだけでなく、現実の戦争を生み出し、またそれを制限する人間の条件を深く把握しようとした点に、『戦争論』が近代兵学の古典たりうる所以がある。クラウゼヴィッツは、人間の条件を忘失し、もっぱら絶対戦争概念のみを絶

18) 筆者が別稿で再構成したクラウゼヴィッツの絶対戦争概念を次に再掲する。「絶対戦争とは、決戦による、敵の殲滅を目標とし、その担い手たる国民の目的と限界以外に、一切の制限を持たない暴力行為である」(「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、10頁)。下線部1が絶対戦争の本質論、2が目標論、3が手段論にあたり、4が制限要因論にあたる。これを分かり易く言い換えるならば、戦争は、理論上、敵を屈服させるために極限的な手段を用いて極限的な目標を追求する、無制限の暴力行為へと絶対化しうる一方で、實際上、国民が自らのために営む全事業中の一部にすぎない以上、人々がそもそも国民という政治的共同体を構成する目的と人々が人間として本来持たざるをえない限界とによる制限に服すべきである、ということになる。

19) クラウゼヴィッツ（清水多吉訳）『戦争論』上、中公文庫、2001年、43頁。

20) 同書、314頁。

21) 同書、315頁。

22) 『戦争論』下、523頁。

23) 人間の本性と戦争とに関わるこの両義的認識に、クラウゼヴィッツ兵学の深い人間学的基礎を見て取ることが出来る。他方後に見るルーデンドルフと石原とは、人間の不完全さが現実の戦争を制限する事実を認識したものの、それを深く人間の条件として理解せず、むしろ単に戦争遂行上の阻害要因と見なしたために、それを克服すべく「人種の遺伝資質」(ルーデンドルフ)や「日本国体の精神」(石原)などの非合理的な精神論に身を委ねる結果となった。

対視する一面的態度を、次のように厳しく戒めている。「戦争の純粹概念から出発して、戦争の目標およびそのために行使すべき手段の絶対基点を、それより演繹しようとするれば、当然われわれは不斷の相互作用を通して極限点に到達せざるを得ないことになる。しかしこの極限点なるものは、論理的技巧に操られた観念の遊戯以上のものではない。……もし人間精神にしてこのような夢想にふけるようなことがあれば、実戦上しばしば力の浪費に陥り、政略の他の諸原則とも抵触するような事態が起つてこないとも限らないし、また戦争の当初の目的とはおよそかけ離れた、現実にはあり得ないような意志の緊張が要求されないとも限らない。このような馬鹿げた意志がどうして現実世界にあり得るわけがあるか²⁴⁾」。

次に第二の要素について、クラウゼヴィッツはこう述べている。「そもそも人生において最も重要なことは、ものを把握し判断するのに必要な立場を正確に突きとめ、それを厳守することである。なぜなら、一つの視点を得ることによってのみ多様な現象は統一的に把握されるものであるし、視点の単一性のみが矛盾の発生を防ぎ得るからである。同様に作戦計画の作成にあたっても、あるいは兵士の眼で、あるいは行政官の眼で、あるいは政治家の眼でものを見るといった多くの視点からの観察などは許され難いことである。とするならば、およそ一切の他の立場を支配する視点は必然的に政治の立場であろうか、という問が生じてくる。政治は内政上の一切の利害、また個人生活の利害や哲学的に考えられる利害をも統一し、調和させるものであるということ、これがわれわれの前提である。なぜなら、政治はそれだけでは意味のないものであり、これら一切の利害の代弁者として他の国家に^{あい}相対するものにすぎないものだからである。政治が誤った方向をとり、名誉心、私的利害、政務官の虚栄心の道具となる場合もないではないが、ここではそれらを考えないことにする。なぜなら、兵術の書が政治に訓戒を垂れるなどということはもってのほかのことであり、ここでは政治を全社会の一切の利害の代弁者と考えるほかはないからである²⁵⁾」。

この文章は、『戦争論』第八部第六章のB「戦争は政治の一手段である」と題された項目中の有名な一節である。ここでクラウゼヴィッツが語るのは、作戦計画における支配的な視点が「政治の立場」であること、すなわち戦争に対する政治の優位を説くクラウゼヴィッツ兵学の基本原則の一つであるが、本稿の視点にとって重要なことは、クラウゼヴィッツがここで政治の本質を、「内政上の一切の利害、また個人生活の利害や哲学的に考えられる利害をも統一し、調和させるもの」、「それだけでは意味のないものであり、これら一切の利害の代弁者として他の国家に^{あい}相対するものにすぎないもの」、「全社会の一切の利害の代弁者」と説明している点である。というのも、この独自の政治観にクラウゼヴィッツの戦争観（兵学）と人間観（人間学）とを結ぶ論理が見て取れるからである。詳論は別稿

24) 『戦争論』上、41～42頁。

25) 『戦争論』下、525頁。

に委ね²⁶⁾、以下においてはクラウゼヴィッツの政治観の文明論的特質に的を絞って、三者の論理的関連だけを述べる。

戦争の本質は無制限の暴力行為である。戦争それ自体に暴力の行使を制限する要素は一切含まれない。騎士道を始めとする前近代の戦争倫理が近代戦争を制限しようと考えことはもはや幻想にすぎない。クラウゼヴィッツのこの革新的な戦争観は、フランス革命を通じて近代戦争がフランス三千万国民を結集する空前の大戦力（*Levée en masse*）を獲得したこと、そしてナポレオンの躊躇なき戦争指導によってこの大戦力が徹底的に行使された結果としての近代戦争の猛威と惨状とを目の当たりにしたことに由る。クラウゼヴィッツがこの痛切な経験に基づいて近代戦争の極限的な姿を「絶対戦争」という明晰な概念へともたらしたことによって、近代兵学が開始された。とはいえ彼の功績はそれにとどまらない。むしろ近代兵学に対するクラウゼヴィッツの最大の寄与は、近代戦争の猛威をこのようにまともに受け止めた上で、その政治的な統制論に途を拓いたことにある。かりにナポレオン軍によって具現された近代戦争の猛威が国民の集団力に基づくとするならば、それを統制する途もまたそこに求められうるはずである。言い換えれば、近代戦争が国民による国民自身の事業となったとするなら、それは同時に国民の目的に奉仕する手段でもなければならず、この目的論的關係の中にこそ近代戦争を統制する途が見出されうるはずである。国民は、なるほど戦時において他国民との厳しい敵対関係を通じて疑う余地のない運命的同胞性を帯びて立ち現われるものの、しかし決して戦争そのものを目的として成立する共同体であるわけでない。そもそも国民は、それ自体として自明の、言わば自然的な共同体を成すわけでない。大勢の人間の生死を左右する戦争という重大事象の考察に際して肝要なことは、戦時下の激情を離れ、そもそも戦争を当事者として担う国民が人間のいかなる本性に基づき、いかなる目的のために成り立つ共同体なのかという根本問題に一旦立ち戻ること、そしてそこから明らかとなる冷静な国民観に従いつつ、国民の手段としての戦争の妥当な在り方を追究すること、これである。クラウゼヴィッツはこの高度に知的な役割を政治に託したのである²⁷⁾。以上を要するに、各々不完全な本性と固有の利害とを有しながら、共存共栄のために相互のより文明的な関係性を追求する多数の人間の共同体（近代国民）と、それが手にする中でも反文明的とさえ言うるほど極度に暴力的な手段（近代戦争）との間に、目的＝手段関係上の妥協点を見出すこと、文明論的に規定されたこの高度の役割を担うものが、クラウゼヴィッツにおける「政治の立場」にほかならなかった。クラウゼヴィッツの最大の功績は、このような政治哲学的洞察を兵学の基盤に据えることによつ

26) 筆者はクラウゼヴィッツの政治観の特質がその「文明論的」性格にある、と考える。詳細については、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、16～21頁を参照されたい。

27) それゆえクラウゼヴィッツは政治を「擬人化された国家の知性」と呼ぶ。『戦争論』上、65頁、ただし訳語を一部変更した。Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, in: *Kriegstheorie und Kriegsgeschichte*, Herausgegeben von Reinhard Stumpf, Deutscher Klassiker Verlag, 1993, S. 38.

て、近代戦争の適切な統制に途を拓いた点にこそあったのである²⁸⁾。

2) ルーデンドルフと石原莞爾における近代兵学の視野狭窄

本稿の視点から見て²⁹⁾、ルーデンドルフと石原莞爾とが近代兵学史において有する最大の意義は、クラウゼヴィッツ後に本格化した科学技術の急速な発展とその軍事的応用とを背景とする戦争威力の飛躍的増大の評価、という新しい視点を近代戦争概念の中にもたらししたことにある。両者の兵学は、科学技術の発展が人類社会にいかなる影響を及ぼし、またそれにどう対処すべきかという、近代世界における普遍的問題との、軍事を舞台とする最初の本格的な格闘の所産であった。しかしながら他方でそれらは、専門科学としての兵学を時代の科学技術水準に適應させることに急なあまり、人間の本性や人間事象の総体性についてクラウゼヴィッツ兵学が有したような深く広い政治哲学的洞察との繋がりを自ら断ち切ってしまった。言い換えれば、ルーデンドルフと石原は、近代戦争の統制という高度の任務を忘れ、一方的に戦争の科学化を追求したために、非人間的で反文明的な戦争概念へと迷い込んでしまった。こうして両者の兵学は、科学技術と人間社会とのあるべき関係をめぐる戦後の岩畔の思索にとって、言わば反面教師の意義を持つこととなったのである。このような視点から、以下においてルーデンドルフの「全体戦争」概念と石原莞爾の「最終戦争」概念との問題性を考察してみよう。

顧みればクラウゼヴィッツがナポレオン戦争の中に見た空前の大戦力とは、前近代の狭隘な社会関係がフランス革命によって一挙に民主化されたことの直接的な結果として生じた戦力拡大に因るものであり、一言で言えば、一散に戦争へと解き放たれた国民の集団力を内実とするものであった。クラウゼヴィッツは、ナポレオンによるこの大戦力の徹底的行使を目撃し、その経験に基づいて「無制限の暴力行為」を本質とする絶対戦争の概念を作り上げたが、その際に、解放された国民の力のいっそう長期的で多面的な成果、すなわち十九世紀以降の科学技術の発展と産業革命の進展との諸成果が、軍事に応用されることによる戦力拡大の問題は、彼の視野にまだはっきりと現れていなかった。クラウゼヴィッツの絶対戦争概念の本質論を継承しつつ、そこに、クラウゼヴィッツがまだ主題化できなかったこの新種の問題を盛り込むことによって近代戦争概念の革新を企てたのが、ルーデンドルフと石原である。この意味において両者の兵学は、やがて核戦力やサイバー軍などの登場へと至る現代軍事技術発展の問題と最初に取り組んだ、現代兵学の先駆けとも言えるものであった。まずルーデンド

28) 近代戦争の極限形態の把握に努める一方で、戦争を含む人間事象全体の、人間本性に適う賢明なあり方の追求という一層高次の努力によって、それを統制しようとする点に、クラウゼヴィッツ兵学の古典的特長がある。言い換えれば、クラウゼヴィッツの『戦争論』は、単に兵学の書であるばかりでなく、戦争を欠かせない人間社会のより文明的なあり方への責任を政治に課する政治哲学の書でもあった。

29) 本稿の意図とそこから導かれる本稿の視点については、前掲註5と本文第二章の1)の冒頭の一節を参照されたい。

ルフから見ることしよう。

「戦争の本質および政治の本質が変化したがゆえに、政治と戦争遂行との関係も変化しなければならない。クラウゼヴィッツの理論はすべて放棄しなければならない³⁰⁾」。第一次世界大戦の衝撃の下、近代兵学刷新の必要を痛感したルーデンドルフは、このようにクラウゼヴィッツ兵学を全面的に批判する独自の立場を打ち出した。とはいえルーデンドルフの全体戦争概念は、近代戦争の本質論に関する限り、実のところクラウゼヴィッツの絶対戦争概念を踏襲したものに過ぎない³¹⁾。すなわちルーデンドルフが考える近代戦争の本質は、クラウゼヴィッツと全く同様に、「無制限の暴力行為」である。両者の相違点は、本質論にあったのではなく、「無制限の暴力行為」が実際に発揮しえた威力の大小に、すなわち近代戦力の実際的な大きさの違いにあり、その背景にあった要因は、言うまでもなく両者の間に横たわる一世紀の間に生じた科学と軍事技術との発展であった。詳論は省き³²⁾、以下では、ルーデンドルフ当時の軍事技術の水準がどのようなものであり、それに基づいて彼が近代戦争概念にどのような修正を行ったかを中心に、彼の全体戦争概念の問題点を整理してみよう。

ルーデンドルフによれば、クラウゼヴィッツの兵学は「会戦や戦闘での敵兵力の殲滅のみを念頭においた³³⁾」もの、すなわち敵味方の軍隊間の戦闘を対象としたものにすぎなかった。なるほど「戦場での殲滅思想」に関する限り、クラウゼヴィッツ兵学は今なお「深い意義」を持つ³⁴⁾。しかし第一次世界大戦が明らかにしたことは、近代戦争が敵軍隊を標的とするだけにとどまらず、敵国民自体をも標的とする新しい性格を持つに至ったこと、これである。ルーデンドルフは次のように指摘する。「世界大戦は、過去一五〇年間のあらゆる戦争と全く異なる性格を見せた。戦争を遂行したのは、相互に殲滅を目指した参戦国の軍だけではなかった。今や国民自体が戦争遂行に動員され、戦争は彼ら自身にもその刃を向けることになり、彼ら自身を極めて深刻な形で巻き込むこととなったのである³⁵⁾」。ルーデンドルフは、戦場での敵軍隊の殲滅にとどまらず、敵国民自体の殲滅を目標とし、それに向け

30) エーリヒ・ルーデンドルフ著、伊藤智央訳・解説『総力戦』原書房、2015年、24頁、ただし訳を一部変更した。
General Ludendorff, *Der totale Krieg*, Ludendorffs Verlag, 1936, S. 10.

31) 筆者が別稿で再構成したルーデンドルフの全体戦争概念を次に再掲する。「全体戦争とは、長期持久的国民戦争」による、国民の生存維持」を目的とし、宿命論的に正当化された、無制限の暴力行為」である」（「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、24頁）。下線部1が全体戦争の本質論、2が目的論、3が手段論にあたり、4が正当性論にあたる。

32) ルーデンドルフの全体戦争概念の詳細については、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、21～33頁を参照されたい。

33) ルーデンドルフ『総力戦』、12頁。

34) 同所。

35) ルーデンドルフ『総力戦』、14頁。ただし訳文を一部変更した。Ludendorff, *Der totale Krieg*, S. 4～5.

て国民全体を直接・間接に戦争遂行に動員する戦争を「全体戦争」と呼ぶ³⁶⁾。近代戦争をそのような戦争に変貌させた要因としてルーデンドルフが最も重視するものは、住民人口の増大や一般兵役義務の導入などの——すでにクラウゼヴィッツ兵学の視野に入っていた——言わば古典近代的な事象に加えて、何よりも——いまだクラウゼヴィッツが知らなかった——航空・通信・宣伝技術の近年における目覚ましい発展である。というのも、これらの新技術を応用した新たな戦争手段の導入こそが、戦場の前線を飛び越して直接に敵国民の肉体と精神の両方に対する攻撃を可能にしたからである。ルーデンドルフは、現代軍事技術と全体戦争との密接な関連について、こう指摘している。「全体戦争は、……住民人口の増大とあいまった一般兵役義務と、さらに破壊力を増してきた戦争手段の導入によって誕生した。……あらゆる種類の爆弾ばかりか、ビラやその他の宣伝材をも住民に投下する航空機の向上や増大と、プロパガンダを敵に向かって広める無線設備の向上や増大などによって、全体戦争はそれ以来さらに深化した³⁷⁾」。

前提とする軍事技術水準の差をめぐるこのような認識に基づいて、ルーデンドルフは、クラウゼヴィッツ兵学を「時代遅れ³⁸⁾」と批判し、それを「すべて放棄しなければならない」と主張した³⁹⁾。クラウゼヴィッツ兵学の上述のような政治哲学的質を見ず、もっぱら軍事技術水準だけを根拠として行われるこのような批判は、言うまでもなく一面的なものにすぎない。加えて、クラウゼヴィッツ兵

36) 本稿では、全体主義的国民観に立脚するルーデンドルフ兵学のイデオロギー的な特質をより明確に把握するために、“Totaler Krieg”の訳語として、一般に邦訳で用いられる「総力戦」という——事柄の軍事的側面に傾斜した——用語でなく、「全体戦争」という——政治学的広がりを持つ——語を用いる。その理由の詳細については、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」の註53（22～23頁）を参照されたい。

37) ルーデンドルフ『総力戦』、15頁。ただし訳文を一部変更した。Ludendorff, *Der totale Krieg*, S. 5.

38) 同書、12頁。

39) しかしルーデンドルフの批判にもかかわらず、実にクラウゼヴィッツの慧眼は、当時の未発達な軍事技術的水準にあっても、自軍が国内に退却し、敵軍がそこに本格的に侵入してきた場合、つまり国内を戦場とする大規模な地上戦となった場合、「一国民全体が武器を手にして抵抗する」（『戦争論』下、281頁）という事態が生じうること、この場合、軍隊のみならず、国民自体が敵軍による殲滅の対象となりうることを、を見通していた。クラウゼヴィッツはこの重大な事態を「民衆の武装（Volkswaffnung）」ないし「国民戦争（Volkskrieg）」と呼び、一章（『戦争論』下、第二章「民衆の武装」、280～291頁、Vom Kriege, SS. 299～304）をその考察に充てている。そもそもクラウゼヴィッツの絶対戦争概念によれば、絶対戦争とは「無制限の暴力行為」を本質とし、「敵の殲滅」を目標とするものであり、この目標論には、「敵軍隊の殲滅」のみならず、——戦争を国民自身の事業と見るなら——少なくとも理論上は「敵国民の殲滅」が含まれうる。「国民戦争」のこの理論上の可能性を現実のものとしたのが、その後における航空・通信・宣伝技術の発展であったのであり、この意味においてルーデンドルフの全体戦争概念は、理論的には、クラウゼヴィッツが先取りした「国民戦争」論の延長上に成立したものである。実際ルーデンドルフは、「全体戦争」を、世界規模に拡大した国民戦争という意味において「世界・国民戦争」（ルーデンドルフ『総力戦』、20頁）とも言い換えており、用語法の点でもクラウゼヴィッツを踏襲している。詳しくは、拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」の註53（22～23頁）を参照されたい。

学に対するルーデンドルフのこの批判は、当然ながらルーデンドルフ兵学自体にもあてはまるものである。なぜなら軍事技術は科学技術一般とともに絶えず発展するがゆえに、その後のいっそう高度の発展段階から見れば、ルーデンドルフ兵学が前提とした軍事技術水準はなお低次元にとどまるものであった、と言わなければならないからである。そこで次に、ルーデンドルフの全体戦争概念自体がいに当時の軍事技術水準に制約されたものにほかならなかったかという点に的を絞って、分析を試みよう。

ルーデンドルフの全体戦争概念の顕著な特徴は、「全体戦争の基礎」として「国民の精神的団結性」を最も重視する点にある⁴⁰⁾。戦争概念に冠せられた“全体(total)”という形容詞が向けられる先は、ルーデンドルフの所説を忠実に読めば、一般的な理解と異なり、“総力”を動員する国家でなく、むしろ精神的に堅く団結して“一体”となった国民であることが分かる⁴¹⁾。ルーデンドルフによれば、全体戦争を遂行するために国民はバラバラの個人の寄せ集めであってはならず、むしろ“戦争共同体”と云いうるほどに精神的に堅く団結した“一つの全体”と成らなければならない。これこそが全体戦争概念に込めようとしたルーデンドルフのメッセージであった。さて問題は、ルーデンドルフがこれほどにまで国民の精神的団結性を強調することと当時の軍事技術的水準とがいかなる論理的関係にあったのか⁴²⁾、そしてこの関係が彼の戦争概念にどのように反映しているのか、ということである。

この問いに対する答えは、その後における軍事技術のさらなる発展から振り返って見れば直ちに明瞭となる。ルーデンドルフが第一次世界大戦の中にその萌芽を見て取った新しい性格の近代戦争、すなわち敵国民自体の殲滅を目標とする国民殲滅戦争は、もしその目標を実際に瞬時かつ確実に実行しうる——例えば後に石原が予想し、岩畔が半ば経験した高度の航空戦力と核戦力のような——強力な攻撃用軍事手段を備えていたならば、必ずしも全国民が精神的に団結して取り組むべき戦争という意味での全体戦争を惹起するものでない。なぜならその場合に戦争は、なるほどそこに全国民の生存が掛かりはするものの、あくまでそのような軍事手段を用いた軍隊ないし政府の事業として、国民の精神的団結性を問う間もなく一瞬の中に終わってしまうからである⁴³⁾。しかしながら第一次世界大戦

40) ルーデンドルフ『総力戦』、26頁、ただし訳文を一部変更した。Ludendorff, *Der totale Krieg*, S.11。

41) ルーデンドルフはそれを明確にこう述べている。「全体戦争においては結局のところ国家でなく『国民』が戦うのである。……全体戦争の重点は国民にある」（同書、51頁、ただし訳文を一部変更した。Ibid., S.28）。

42) ただしルーデンドルフが国民の精神的団結性を強調したことには、本文で述べる論理的な必然性だけでなく、彼自身の大戦経験に由来する個人的で実際的な理由も存在した。すなわち、ルーデンドルフ自身がドイツ軍参謀次長として率いた戦争が国内戦線の崩壊と革命とを伴うドイツの——彼の眼から見て——呆気ない敗戦によって終結したことが、彼の心底に深い怨念を育み、それが彼の戦争概念に対して、——国民の精神的団結性を訴えるために怪しげな人種論まで投入する——過激なイデオロギー的傾向性を付加したように思われる。

43) 石原は、科学技術の将来的発展がやがて今日のものとは比較にならないほど強力な航空戦力とさらには未曾

当時の軍事技術水準においては、なるほど航空機や戦車や毒ガスのような新兵器、無線や宣伝のような新技術の登場を見たものの、一気の大決戦を可能とするほどに巨大な破壊力を持つ攻撃手段はまだ登場していなかった。当時の軍事技術水準では、なお防御戦力が攻撃戦力を上回ったために、戦争は自ずから長期持久戦争とならざるをえなかったのである。これこそルーデンドルフが直面した歴史的状況であった。すなわち、すでに敵国民自体の殲滅という目標論とその意図とが確かに交戦国間に存在するものの、それを瞬時に実行するに足る強力な攻撃用軍事手段がまだ備わらず、それゆえ戦争が否応なしに長期化せざるをえない状況、がそれである。この状況においてこそ、国民の精神的団結性が重要な課題となる。なぜならこの場合には国民が長期にわたって国民殲滅戦の恐怖に晒され続けることになるがゆえに⁴⁴⁾、戦争の勝敗は、国民がどこまで精神的団結性と抗戦意志とを堅持できるか、に懸かってくるからである⁴⁵⁾。

さて戦争をめぐるこのような客観状況を正確に認識することは、兵学が果たすべき任務の一つであり、ルーデンドルフが、当時の軍事技術水準に照らした長期持久戦争の不可避性とそのような戦争における国民の精神的団結の必要という国民的課題とを、「全体戦争」という独自の概念によって明確にしたことは、近代兵学史における彼独自の功績である、と言ってよい。たしかにルーデンドルフの全体戦争概念は、クラウゼヴィッツがいまだ知らなかった軍事技術水準の認識に基づいて、長期化する国民殲滅戦という近代戦争の猛威の新局面を明らかにした。しかしながら他方でその最大の問題性は、クラウゼヴィッツによって古典的な形で示された近代戦争概念の今一つの任務、すなわち政治

有の核戦力とをもたらしことを予想した。石原によれば、それらを用いた戦争（最終戦争）の様相は、ルーデンドルフが云う全体戦争（総力戦）のそれと全く異なり、瞬時に終わる大決戦となる。石原はこう述べている。「〔最終戦争は〕かくて空軍による真に徹底した殲滅戦争となります。……今日のように陸海軍などが存在しているあいだは、最後の決戦戦争にはならないのです。……軍艦のように太平洋をのろのろと十日も二十日もかかっては問題になりません。それかと言って今の空軍ではとてもダメです。……それ精神総動員だ、総力戦などと騒いでいる間は最終戦争は来ない。そんなまぬるいのは持久戦争時代のことで決戦戦争では問題にならない。この次の決戦戦争では降ると見て笠取るひまもなくやつつけてしまうのです」（石原莞爾『最終戦争論・戦争史大観』中公文庫、1995年、36～37頁。〔〕内は引用者による）。

44) ルーデンドルフは全体戦争下の国民の心理を「包囲下にある要塞の住民」のそれに譬えている。ルーデンドルフ『総力戦』、16頁を参照されたい。

45) ルーデンドルフは、自らの念頭にある近代戦争が長期持久戦争であること、そのような戦争においては国民の精神的団結性が不可欠の基礎となることを、次のように明言している。「軍は国民に根ざし、国民を構成する一要素である。全体戦争において、軍の強さは、国民の肉体的、経済的、精神的強さと同等になる。一朝一夕に終わることがなく、むしろ非常に長期間継続する可能性のある戦争において、国民の維持という目的のために生存を賭して闘う際に、軍と国民は団結性を必要とする。この団結性を軍と国民に与えるのは、精神的な力である。つまるところ精神的団結性こそは、国民の生存維持をめぐるこの戦争の結末にとって決定的な重要性を持つ」（同書、26頁、ただし訳文を変更した。Ludendorff, *Der totale Krieg*, S.11.)。

による戦争の統制を、それが全く放棄してしまった点にある。ここでクラウゼヴィッツの戦争概念に鑑みてルーデンドルフ兵学が取り組むべきであった任務をあらためて整理するならば、それは、第一に長期持久戦の不可避性とそれに備えた国民の精神的団結の必要性とを明確な認識にもたらすことであり、第二にこのような軍事的必然性と人間の本性および国民の目的という文明論的制限要因との間に妥協点を見出し、それに基づく戦争の統制を「政治の立場」に委ねること、これであつたはずである。しかしながらルーデンドルフの全体戦争概念は、第一の任務だけに専念し、第二の任務を否定した。他方で翻つてもっぱら狭義の兵学の視点、つまり純軍事的合理性の視点から見るとすれば、これはある意味で当然のこととも言う。というのも、長期化する国民殲滅戦の不可避性が予想されるのなら、それに万全の備えをすることこそが専門科学としての兵学本来の任務だからであり、第二の任務は言わば余事にほかならないからである。このような専門主義的姿勢は、もしそれが専門科学としての任務の自覚的な自己限定を意味するのなら、なるほど正当なものであるとも言えよう。しかしながらルーデンドルフの場合、第二の任務の否定は、むしろより普遍的な課題が自らの上位に存在すること自体の否認を意味するものであつた。ルーデンドルフのこの軍事至上主義的な姿勢は、純軍事的視点から見た戦争の現実性を、その緊迫感に圧倒されるあまり現実そのものと遮断する、一種の視野狭窄した現実観の結果として生じた⁴⁶⁾。

このようにルーデンドルフの全体戦争概念が戦争を他の全ての人間事象に優越する「極めて重大な現実」として絶対視するものであるとするなら、そこから生じる戦争と国民との関係論および戦争と政治との関係論は、クラウゼヴィッツ兵学が達成したような高度の文明論的質を持つものとはけつしてなりえない。詳論は別稿に委ね⁴⁷⁾、ここではルーデンドルフの全体戦争概念が帰結する戦争と国民と政治それぞれの本質と三者の相互関係とを、そのような視野狭窄が生む思考の歪みに力点を置きつつ、次に簡潔に要約したい。すなわち、戦争とは、「国民の生存維持⁴⁸⁾」という至上目的のために行われる「崇高で重大な⁴⁹⁾」闘争行為である⁵⁰⁾。国民とは、自らの自由と永生のために闘争を運命づ

46) 戦争の現実性を絶対視する次の発言は、その真剣な口調とともに、ルーデンドルフ兵学のそのような視野狭窄を明瞭に物語る。「私はあらゆる理論を敵視している。戦争とは現実であり、つまるところ、ある国民の生活の中での極めて重大な現実である」(同書、11頁)。クラウゼヴィッツにとって「絶対戦争」が政治による戦争の統制という目的の下に、あくまで近代戦争の極限的な猛威を明晰に認識するために仮構された概念であつたのに対して、ルーデンドルフにとって「全体戦争」は、戦争に対するそのような知的距離感を失って、疑いのような現実そのものと化している。ルーデンドルフの激しいクラウゼヴィッツ批判と総じて戦争を理論的に扱おうとする態度の敵視とは、彼のこのような視野狭窄した現実観に起因する。

47) 前掲註32を参照されたい。

48) ルーデンドルフ『総力戦』、16頁。

49) 同頁。

50) 戦争の崇高さと重大さを根拠づけるものは、このようにルーデンドルフにとっても国民の正当性である。と

けられた、地上の戦争神とも言うべき至高の存在である⁵¹⁾。政治とは、国民への帰属性と奉仕義務との深い自覚を構成員の間に育むことを通じて、日常的に戦争に奉仕する行為である⁵²⁾。このようにルーデンドルフの全体戦争概念は、全体戦争の切迫した現実性という、それ自体としては客観性を帯びた現実認識を起点としながら、それを唯一究極の現実へと絶対化し、それに適合するよう国民観と政治観を極端に変形させたものである⁵³⁾。クラウゼヴィッツ兵学の古典的立場によれば、そもそも国民とは不完全な本性を持つ人間が相互のより文明的な関係を築くために形成した共同体であり、戦争はその国民が「政治の立場」に基づいて行使する一手段にすぎない。ルーデンドルフの全体戦争概念は、全体戦争の現実性を絶対視することによって、政治と戦争との関係を逆転させるばかりでなく、総じて人間と人間が自らのためにする諸々の社会的行為とのこのような目的論的關係を完全に転倒させてしまう。

はいえクラウゼヴィッツ兵学と異なり、ルーデンドルフの場合、戦争の現実性の認識が他の全てに優先し、そこから一切の論理が導かれるために、国民観も政治観も、一面的にそのような戦争観によって規定された、極端なものへと歪められてしまう。

51) 地上における国民間の生存闘争を唯一究極の現実と見なすためには、それを超越したところに天国や地獄の存在を説くキリスト教の教えが妨げとなる。それゆえルーデンドルフは、キリスト教への対抗を念頭に置きつつ、「人種の遺伝資質に基礎づけられた宗教認識」という擬似宗教的な論拠を持ち出して、次のように国民を、その構成員が自らの生命をもって奉仕すべき神聖な運命共同体へと高める。「あらゆる人種の遺伝資質は固有の宗教体験を含む。……ドイツ人の宗教認識は、いずれは死ぬ人間としての個々人を——不死の——国民の中にしっかりと根付かせ、国民に対する重大な義務を個々人に負わせる。そこには命をもって国民を擁護する義務も含まれる。ドイツ人の宗教認識は、長い世代連鎖の中で実際に国民を、闘争能力および生存意志をもった運命共同体……にする」(ルーデンドルフ『総力戦』、41～42頁、ただし訳を一部変更した。Der totale Krieg, S. 21～22)。ルーデンドルフのこのような国民観は、キリスト教的に見れば一種の被造物神化、ないし現世的代用神としての国民の自己崇拝と言いうるものであるが、しかしクラウゼヴィッツ兵学に即して見るならば、それは、「人間の本性」を忘れ、もっぱら「戦争の純粹概念」に基づいて国民を純然たる戦争共同体と夢想する「観念の遊戯」の所産と言わなければならない。前掲註 23、24 と該当の本文とを参照されたい。

52) ルーデンドルフ兵学においては、このように戦争と政治との関係がクラウゼヴィッツ兵学と正反対のものへと転倒し、政治が戦争の手段となる。彼はこう述べている。「戦争と政治はともに国民の生存維持に奉仕する行為であるが、しかし戦争は国民の生存意志の最高の発露である。それゆえ政治が戦争に奉仕しなければならない」(同書、24頁、ただし訳を一部変更した。Der totale Krieg, S. 10)。

53) 要するにルーデンドルフの全体戦争概念は、戦争を至上命題としつつ国民と戦争と政治の三者が融合して出来上がった、ある「巨大な統一体」の表象であった。ルーデンドルフはそれについてこう述べている。「全体戦争の重点は国民にある。全体戦争の遂行は国民を考慮に入れなければならない。全体政治は、国民の力を戦争遂行に十分に供することができるよう、国民の扶養に努めなければならない。人種および精神の深遠な法則を遵守することが、国民、戦争遂行、政治を溶接して強力な統一体へと鍛え上げることを可能にする。この統一体こそが国民の生存維持の基礎である」(同書、51頁、ただし訳を一部変更した。Der totale Krieg, S. 28)。

ルーデンドルフの全体戦争概念が孕むこのような問題性を、発展する科学技術への過信が人間社会にもたらしうる悪影響の問題として整理し直してみるならば、それは次のように言うことができよう。すなわち、科学の専門分化が進むとともに、個別専門科学が人間的現実の総体に対する自らの視野を狭めてゆく一方で、科学に基づいて開発される各種の技術が人間の現実に対する影響力をいよいよ増してゆくとするならば、特定の専門的視野の中で形成された特殊な科学的現実観が、技術の拡大する影響力の強烈な印象を通じて不当に一般化され、いつのまにか人間の現実そのものと速断されてしまう、という問題がそれである。そもそも人間は、物質であり、生物であり、政治や経済や戦争などの様々な社会的行為を行う社会的存在であり、かつまた自己と宇宙を認識しつつ文化を形成する精神的存在でもある。人間の現実はいずれの総体として成立する。他方、科学はその専門性に依拠して総体としての現実からそれぞれ自覚的に特定の一面を切り取り、特定の方法に基づいて特殊な現実観を形成する知的営みである。それゆえ総体としての人間的現実に対する視野狭窄は、この意味で専門科学が現実に関する精密な知識を獲得するための条件であるとも言えるが、しかし専門科学からそのような方法的自覚が失われるとき、この視野狭窄は実際の病弊となる。この問題は恐らくどんな専門分野にも付きまとうものであろう。とはいえ兵学は、自らが形成する特殊な現実観を現実そのものと取り違える誘惑に殊更晒され易い専門分野ではなかろうか。というのも、兵学の対象が元々国家の存亡と大勢の生死とに直結する戦争という重大な人間事象であること⁵⁴⁾に加えて、戦争が国民自身の事業となったフランス革命以降、国家の武力だけでなく近代国民の情熱と能力の全てがそこに注ぎ込まれるようになったからである⁵⁵⁾。これ以降、戦争は国民の心の世界との密接な繋がりを得たことによって一段とその現実性を増した。ルーデンドルフの全体戦争概念は、まさに科学と技術と戦争をめぐるこのような歴史的趨勢を背景として、自らが認識したところの“巨大化する近代戦争の現実性”を人間的現実の全体と速断するものであった、と言えよう。

さて次に石原莞爾の最終戦争概念の問題性について考察してみよう。問題の構図はルーデンドルフの場合と同様である。すなわち石原は、「無制限の暴力行為」というクラウゼヴィッツの絶対戦争概

54) 『孫子』冒頭の有名な一節は、これを次のように述べている。「孫子曰く、兵とは国の大事なり、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり」（『新訂孫子』、26頁）。

55) クラウゼヴィッツは、絶対戦争の概念構成を通じてまさにこの歴史的事態を明晰な認識へもたらし、それによって専門科学としての近代兵学の創始者となった。しかしその際に彼は、兵学があくまで専門科学にとどまるものであること、人間的現実をより総体的に把握し判断するためには「政治」というより高度の立場が必要であることをも決して忘れなかった。「兵術の書が政治に訓戒を垂れるなどということはもつてのほかのことであり、ここでは政治を全社会の一切の利害の代弁者と考えるほかはない」というクラウゼヴィッツの言葉は、この自覚を明言するものである。前掲註25を参照されたい。

念における本質論を踏襲する一方で、戦争が実際に発揮しうる威力が科学技術の発展によっていまや空前の規模に達した事実を認め、その認識を中核として自らの戦争概念を形成した⁵⁶⁾。その際に石原は、ルーデンドルフと同様に、来るべき戦争のあまりの巨大さゆえに、それを政治的に統制することを断念し、むしろ巨大戦争の全面的な承認とその耐忍の中に国民の命運を託そうとする。しかしながら他方で、石原とルーデンドルフとの間にはほぼ一世代の年齢差が存在し、それゆえ石原の戦争概念は、その四半世紀の間に生じた科学技術発展についての新たな認識を反映することによって、ルーデンドルフのそれとかなり異なる特徴を持つこととなった⁵⁷⁾。以下においては、ルーデンドルフの戦争概念とのこの相違点を中心に、石原の最終戦争概念の特徴とその非人間的な帰結とを見ることにしたい。

ルーデンドルフは科学技術の発展によって「戦争の本質」が変化したことを根拠としてクラウゼヴィッツ兵学を否定したが⁵⁸⁾、ルーデンドルフ兵学に対する石原の批判もまた同様の根拠に基づくものである。石原は、ルーデンドルフ兵学の根本的な欠陥を、科学技術文明の発展に起因する「戦争の本質」の変化を正しく認識できなかった点に求めた⁵⁹⁾。石原によるこの批判は、第一次世界大戦におけるドイツ敗戦の原因分析と関連する。石原によれば、当時ドイツ軍参謀本部を率いたルーデンドルフは、近代戦争の性質がナポレオンやモルトケの時代の「決戦戦争」からすでに「持久戦争」へと変化していたにもかかわらず、これを正確に認識できず、あくまで従来通りの殲滅戦略に固執したために、惨敗を喫した⁶⁰⁾。ルーデンドルフによるクラウゼヴィッツ批判が十分な学問的根拠づけを持たな

56) 筆者が別稿で再構成した石原の最終戦争概念を次に再掲する。「最終戦争とは、史上最終の大決戦による、世界の統一」を目的とし、終末論的に正当化された、無制限の暴力行爲である」(「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、35頁)。下線部1が最終戦争の本質論、2が目的論、3が手段論にあたり、4が正当性論にあたる。

57) ルーデンドルフの『全体戦争』初版の刊行が1935年、石原の『最終戦争論』初版の刊行が1940年であるから、なるほど両書の間にはわずか五年の差しか存在しない。しかしながらすでに1918年末に軍務を離れたルーデンドルフの戦争概念が根本的に第一次世界大戦時の経験によって規定され続けたのに対して、ルーデンドルフ(1865年生まれ)よりほぼ一世代若く、『最終戦争論』初版刊行時にまだ現役軍人であった石原(1889年生まれ)の戦争概念は、第一次世界大戦時の経験ばかりでなく、それ以降に生じた、戦争をめぐる重要な世界史的動向についての認識をも反映することとなった。その一つは若干の超大国ないし国家連合の形成とそれらによる世界の分割支配へと徐々に向かう、国際政治上の動向であり、今一つは新たな航空・核戦力の開発とそれらに基づく空前の大戦争勃発の現実性という、科学・軍事技術上の動向である。

58) 前掲註30と該当の本文とを参照されたい。

59) 石原は次のように指摘している。「ルーデンドルフ一党はデルブリュックの言う如く戦争の本質に対する明確な見解を持たなかったのである。即ちナポレオン以後は決戦戦争が戦争の唯一のものであると断定して、彼らが既に持久戦争を行いつつある事を悟り得なかったのである」(石原『最終戦争論・戦争史大観』、218頁)。

60) 石原は言う。「ドイツ参謀本部は、戦争を十八世紀前のものと後のものとに区別したが、戦争の性質に対する

いまま、すでに見たように「人種の遺伝資質」に基づいてもっぱら国民の精神的団結を訴える一種の過激な政治イデオロギーと化したことと比べるならば、石原によるルーデンドルフ批判は、文明の発展に基づく軍事技術の進歩と戦争の性質の累次的変化との因果関係を西洋戦争史に即して論証する、高度に学問的なものとなっている。その論証は緻密であり、その結論には説得力がある。詳細は別稿に委ね⁶¹⁾、ここではその結論のみを次に要約する。石原によれば、文明の発展は軍事技術を進歩させることによって時とともに戦争の威力（戦力）を拡大してきた。「戦争本来の真面目^{しんめんぽく}」は敵戦力を一気に殲滅する「決戦戦争」であるから⁶²⁾、西洋戦争史はそれを可能にすべく常に戦力の拡大を追求してきた。しかしながら文明の一般状況の在り方如何によっては、防禦戦力が攻撃戦力を上回ることなどが原因となって決戦を敢行できない時期がある。その時期に戦争は「持久戦争」の性質を持つことになる⁶³⁾。西洋戦争史を大観すれば、戦争はこれまでに、①決戦戦争（古代）、②持久戦争（初期近代）、③決戦戦争（仏革命以後）、④持久戦争（第一次大戦以後）の四次にわたって、決戦戦争と持久戦争の交代を繰り返してきた。ルーデンドルフの誤りは、すでに戦争の性質が持久戦争に変化し、本格的な決戦が不可能となっていることを薄々感知しながら、それを明確に認識できなかったために、戦争の性質に対応する適切な戦略と政略を採ることができず、戦争指導に混乱を来したことにある⁶⁴⁾。

さてルーデンドルフ兵学に対する石原のこのような批判は、関東軍や参謀本部の現職の身として実務上の必要に応じるためのものでもあった。つまり石原の戦史研究は、近代戦争の発展の行方を見通し、それに基づいて日本将来の国防国策を立案しようとする彼の努力の一環を成す。ルーデンドルフは持久戦争の時代に決戦戦争を追求する無理のゆえにドイツの惨敗を招いた。しかしながら他方で石原の予測によれば、持久戦争の時代はいずれ終わりを迎え、再び決戦戦争の時代が到来するはずである。なぜなら戦争の発展史は文明の発展史と歩調を揃えて進むがゆえに、文明のさらなる発展が防禦戦力を上回る攻撃戦力をもたらすことになれば、ふたたび決戦戦争が可能となるからである。石原の

徹底せる見解を欠いていた。欧州大戦は既にナポレオン、モルトケ時代の戦争と性質を異にするに至った事を認識しなかった事が、第一次欧州大戦に於けるドイツ潰滅の一因と云われねばならない」（同書、163頁）。

61) 拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、39～46頁を参照されたい。

62) 石原『最終戦争論・戦争史大観』、12頁。

63) 石原は決戦戦争と持久戦争の相違を次のように譬えを用いて分かり易く説明している。「武力の価値が他の手段にくらべて高いほど戦争は男性的で力強く、太く、短くなるのであります。言い換えれば陽性の戦争——これを私は決戦戦争と命名しております。ところが色々の事情によって、武力の価値がそれ以外の手段、即ち政治的手段に対して絶対的でなくなる——比較的価値が低くなるに従って戦争は細く長く、女性的に、即ち陰性の戦争になるのであります。これを持久戦争と言います」（同書、12頁）。

64) 石原によれば、当時ルーデンドルフは無理な決戦を追求して自滅する代わりに、「軍事的成功を活用し、米国大統領の無併合、無賠償の主義を基礎として断固和平すべきであった」。同書、218頁を参照されたい。

最終戦争概念はその時に備え、なおかつ来る決戦戦争を人類史上における「最後の決戦戦争⁶⁵⁾」と位置づけ、覚悟をもってそれに臨むための理論であった。詳論は別稿に委ね⁶⁶⁾、ここでは最終戦争概念における戦争の正当性論、すなわち来る決戦戦争を、人類の戦争史に終止符を打つべき崇高な使命を帯びた最終戦争として意義づける終末論的な正当性論、の問題性に的を絞って論じることとしたい。

クラウゼヴィッツの絶対戦争概念は、近代戦争の絶大の猛威を概念的に把握するとともに、他方で「人間の本性」と「国民の目的」とに関する政治哲学的洞察によって根拠づけられた「政治の立場」を導入し、それに基づいて近代戦争の猛威を適切に統制すべきことを唱えるものであった。もっぱらここから見るならば、石原の最終戦争概念は、ルーゼンドルフの全体戦争概念と同様に、政治による戦争の統制というそれ本来の任務を放棄する点で、そもそも近代戦争概念の名に値しない、と言わなければならない。しかしながら翻って石原の側から見返してみるならば、問題はどのように映じるであろうか。言い換えれば、石原はなぜ政治による戦争の統制論を断念しなければならなかったのであろうか。その理由は、一言で言うならば、クラウゼヴィッツ兵学における「政治の立場」が国民国家的枠組の中で構想され、その制約に縛られたものであったことに求められる。これは石原兵学だけで

65) 同書、36頁。

66) 拙稿「一軍人の戦後——岩畔豪雄と京都産業大学——下」、33～48頁を参照されたい。最終戦争概念の目的論と正当性論は別として、その鋭利な手段論には見るべき点がある。石原の最終戦争概念最大の特長は、クラウゼヴィッツの絶対戦争概念における本質論（無制限の暴力行為）を踏襲しつつ、クラウゼヴィッツが明確に主題化しえなかった戦争手段の歴史的発展の問題を、広く文明発展史を視野に収めた独自の戦史研究を通じて追究した点にある。かりに戦争史を文明の発展に基づく戦争発展の歴史、とりわけ戦力拡大のために文明の成果を活用することによって不断に戦争手段を開発する歴史と見るなら、クラウゼヴィッツが云う絶対戦争、すなわち近代戦争の極限形態を把握するためには、単に暴力行為の無制限性に注目するだけでは不十分であり、その無限界性をも見なければならない。言い換えれば、戦争の論理の中に暴力行為を制限する要素が全く存在しないことを言うだけでなく、戦争の実効的な威力が文明の絶えざる発展のゆえにどこまでも拡大しうるものであることにも注目しなければならない。石原の最終戦争概念は、戦争が発揮する威力の歴史的拡大がはたしてどこまで到達しうるのか、すなわち「人類争闘力の最大限」（石原『最終戦争論・戦争史大観』、152頁）が、いつ、どのように達成されるのか、に着目するものであった。クラウゼヴィッツの絶対戦争概念が、戦争の実効的な諸条件の抽象とそれ本来の性質の抽象とによって戦争の極限形態を論理的に認識しようとしたものとするなら、石原の最終戦争概念は、戦争史に内在する論理、すなわち絶えざる軍備拡張競争の論理の解説に基づいて「人類争闘力の最大限」を歴史的に認識しようとしたものである、と言えよう。要するに石原の戦争概念は、クラウゼヴィッツの戦争概念の歴史的応用にほかならない。他方その最大の問題性は、本文次段落以降で見るように、クラウゼヴィッツの戦争概念における制限要因論に代えて、戦争概念の中に終末論的な正当性論を持ち込んだ点にある。石原兵学の論理に従えば、そもそも戦争の歴史的発展には限界が無いはずであり、それゆえ最終戦争は本来ありえない。それにもかかわらず石原が最終戦争論を唱えたのは、政治による戦争統制の途を否定したために、来るべき巨大戦争とそれがもたらすはずの大惨事とからの救いの契機を終末論的な意味論に求めるほかなくなったからではなかろうか。

なくルーデンドルフ兵学にも共通する事柄であるので、ここで併せて考察してみよう。

夙にルーデンドルフが第一次世界大戦の中に見て取ったように、近代戦争の発展は、戦場で敵兵力と戦うだけにとどまらず、前線を飛び越して直接に敵国民を標的としうるだけの強力な軍事手段を備えるまでに至った。これによって近代戦争の現実的な目標が、敵軍隊の殲滅から敵国民自体の殲滅の段階へと押し上げられることとなったのである。クラウゼヴィッツ兵学において、戦争はなるほど重大な事象であるとはいえ、国民が営む他の諸々の事業と並ぶ一事業にほかならず、この点に、政治が「全社会の一切の利害の代弁者⁶⁷⁾」として他の諸事業との均衡を図りつつ戦争を統制しうる内政上の根拠が存在した。しかしながら、もし戦争の歴史的発展が国民の生存そのものを左右するほどに戦争を巨大化させるような段階に達するとするなら、国民にとって戦争に並ぶ事業はもはやほかにありえず、戦争こそが最大の国民的関心事となろう。加えて交戦国が互いに本気で敵国民の殲滅を目指して戦うとするなら、敵国民はもはや相対的な敵、すなわち交渉可能な相手ではなく、むしろそれとの間にいかなる交渉もありえない絶対的な敵となる。交戦国が互いに敵国民をまともにそのような敵と見なすとき、戦争はもはや文明の制度たることをやめ、食うか食われるかの赤裸々な生存闘争と成らざるをえない。そのような戦争においてはそもそも外交の余地が全く存在しえない。実はクラウゼヴィッツもそのような極限的事態を想定して、次のように述べていた。「戦争とともに政治的視点が完全に消滅するといったようなことは、戦争が敵意にのみ由来する生死の闘争である場合にしか考えられることではない⁶⁸⁾」。とはいえそのような事態は、クラウゼヴィッツにとってあくまで理論上の極限点として仮定されたものにすぎなかった⁶⁹⁾。しかしながらルーデンドルフと石原にとって、そのような極限的事態は決して理論上の仮定でなく、いまや現実そのものと思われた。というのも近代戦争の発展が理論上の事態を現実化できるだけの威力を戦争に与えたからである。対立する二つの国民国家が、いまや相手の存在そのもの——すなわち相手国民——を殲滅するに足る十分な戦力とその意志とを互いに備えるに至ったとするなら、両者間の戦争は文字通り「生死の闘争」と成らざるをえない。その場合、国民国家の内部に設定された「政治の立場」は、いかにそれが「知性」や「頭脳」としての高い地位を冠がわれたものであるにせよ、「国民の生存維持⁷⁰⁾」を超えたところに自らの任務を持つことはできない。というのもそれは、比喩的に言えば知性が自らの身体を否定すること、すなわち自殺

67) クラウゼヴィッツ『戦争論』下、525頁。

68) 同書、526頁。

69) クラウゼヴィッツは前掲註68の引用文にただちに続けて、次のように述べている。「だが、ありのままの戦争を見れば、それは、すでに述べたごとく、政治そのものの表現にほかならないことがわかるであろう。政治が戦争を生み出す以上、政治的視点が軍事的視点に従属するなどということは矛盾も甚だしい。政治は頭脳であり、戦争は単なるその手段であって、その逆ではない」（同頁）。

70) ルーデンドルフ『全体戦争』、26頁。

にはかならないからである。その場合に「政治の立場」に可能なことは、戦争を制限することではなく、むしろ全力を挙げて戦争遂行に協力すること、これ以外にない。これがルーデンドルフの結論であり、同じく石原の結論でもあった。

そもそもクラウゼヴィッツが絶対戦争概念の中に「政治の立場」を導入したのは、文明の制度としての国家とそれが必要悪として用いる戦争との間に妥協点を見いだし、そのことを通じて戦争の暴力を辛うじて文明の範囲内に制限するためであった。もし文明の発展とともに近代戦争が際限なくその威力を増してゆくとするなら、そして国民国家内部に設定された「政治の立場」がもはやそれ本来の役割を果たすことができないとするなら、戦争とともに国家自体が文明の制度たることを止め、単なる暴力機構へと、純然たる野蛮へと転落せざるをえない。文明論的に見るならば、これがルーデンドルフと石原が直面した問題状況である。それゆえこれに対する正しい対処法は、近代戦争を統制すべき「政治の立場」そのものを否定することではなく、むしろそれを国民国家の内部から取り出し、より広くより大きい枠組においてそれを再構成すること、ここに求められなければならないはずである。この新たな課題を追求したのが岩畔豪雄であり、それについては後に見る。しかしルーデンドルフと石原が選んだ方法は、あくまで近代戦争概念成立の歴史的基盤たる国民国家の枠組に固執し、「政治の立場」による戦争の制限に代えて、過激な国民主義の立場から戦争の正当化を図ること⁷¹⁾、これであった。もし国民生活における戦争の肥大化をもはや制限できないとするなら、国民が戦争に投じる真剣な意気込みや国民が戦争に見出す崇高な意義などという主体的な要素の中に、戦争という行為自体の野蛮さを償う一種の救いのようなものを見出し、それを通じて戦争を正当化するほかない。言い換えれば、ルーデンドルフと石原の両者は、戦争を遂行する主体としての国民の強烈な自覚の中に、言わば戦争の暴力性を浄化すべき要素を見出そうとしたのである。

ルーデンドルフの全体戦争概念が、長期持久戦争を国民生存の宿命的現実と見、それに敢然と立ち向かう国民の精神的団結性を「全体性」の名のもとに神聖化するものであったことは、すでに見た通りである。他方石原の戦争史観によれば、持久戦争は第一次世界大戦から今日に至る戦争史上の一時期において戦争が帯びた性質にほかならず、やがて戦争の性質は文明の発展とともに決戦戦争へと決定的に変化する。石原の最終戦争概念は、これを認識するとともに、来る決戦戦争を、人類の戦争史に終止符を打つ最終戦争として敢行するところに日本国民の崇高な歴史的使命を見出そうとするものであった。石原は、来る決戦戦争が世界を統一し、世界に平和をもたらす最終戦争となる理由を次のように説明している。「この次の、すごい決戦戦争で、人類はもうとても戦争をやることはできないということになる。そこで初めて世界の人類が長くあこがれていた本当の平和に到着するのであります。要するに世界の一地方を根拠とする武力が、全世界の至るところに対し迅速にその威力を発揮し、

71) ルーデンドルフの全体戦争概念は近代戦争を宿命論的に正当化し、石原の最終戦争概念は近代戦争を終末論的に正当化した。前掲註 31 と 56 を参照されたい。

抵抗するものを屈服し得るようになれば、世界は自然に統一することとなります⁷²⁾。石原は、この最終戦争が「空軍による真に徹底した殲滅戦争⁷³⁾」となり、その結果、敵国の首府や主要都市ばかりか、わが国の「大阪も、東京も」すっかり廃墟と化す⁷⁴⁾、それどころか「世界の人口は半分になる⁷⁵⁾」かもしれないような、大惨事をもたらすであろうことを、明確に予想した。しかしながらそれにもかかわらず石原はそこに「全人類の永遠の平和を実現」すべき日本国民の使命を見出すことによって、この大惨事を是認してしまう。石原は次のように述べている。「数十年後に迎えなければならないと私たちが考えている戦争は、全人類の永遠の平和を実現するための、やむを得ない大犠牲であります⁷⁶⁾」。このように石原は来る決戦戦争の空前の破壊力とそれがもたらす大惨事とを明確に見通しながらも、国民的使命感に訴えることによってそれを「やむを得ない大犠牲」として肯定した。しかしながら「全人類の永遠の平和」というようなあまりにも茫漠とした目的論が、世界人口を半減させうる大惨事の償いとなることは、決してありえない。石原兵学においては、最終戦争についての科学的な予測論と、人類社会のために最終戦争の必要性を論証する哲学的な根拠づけとが、全く調和していない。こう見れば、石原兵学の問題性は、必ずしも科学技術を軽視したことにあるのではないことが分かる⁷⁷⁾。むしろそれは、クラウゼヴィッツ兵学の古典的立場に倣って言うならば、科学技術を、あくまで人間の本性に適い、文明社会の目的に応じる一手段として活用するために、兵学が政治哲学的な基盤を必要とする、という最重要事を見失ったこと、ここにあったのである。ルーデンドルフ兵学と同様、石原兵学もまた科学技術のあまりの発展を前にして視野狭窄に陥った典型的な事例であった。

72) 石原『最終戦争論・戦争史大観』、35 頁。

73) 同書、36 頁。

74) 同書、37 頁。

75) 同書、50 頁。

76) 同書、62～63 頁。

77) 吉田満が『戦艦大和ノ最期』の中に書き留めた、「日本ハ進歩トイウコトヲ輕シ過ギタ 私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワッテ、本當ノ進歩ヲ忘レテイタ」という白淵大尉の言葉は、必敗を眼前にして日本軍人としての深い自省を語るものであり、彼が云う「本當ノ進歩」が何を指すかは、即断すべきでなかろう（吉田満『戦艦大和ノ最期』講談社文芸文庫、1999 年 8 月、46 頁）。しかし仮にそれを「科学技術の進歩」と取るなら、その反省は石原兵学には当たらない。なぜなら科学技術の進歩を最大限に重視した点にこそ、石原兵学の特長があったからである。石原は来る決戦戦争における大空襲に備えるべく、「二十年を目途とし」、政治・経済上の中心都市の徹底的防空都市化、官憲の大整理、都市における中等学校以上の全廃、工業の地方分散、都市人口の大縮小、市街の大改築などの抜本的対策を提案している（石原『最終戦争論・戦争史大観』、36 頁および 282～283 頁）。これらの政策論の是非は別として、近代戦争の凄まじい破壊力をこのようにありありと可視化しえた点に、科学技術を重視した石原兵学の鋭い認識能力が示されている、と言いうる。

